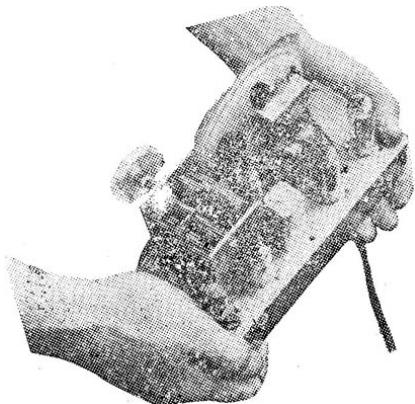


## Tele-Tone Model-165 並 4 球 “アメリカ版”

宮地 浩



第1図 いわゆる傍熱型ミニチュア管を使用したトランスレス

るかに感じが良い。高さ 15 <sup>センチ</sup> 粱、幅員 22 粱、奥行 9 1/2 粱で、純トランスレスであるから重量は 1.14 <sup>キログラム</sup> 粱である。

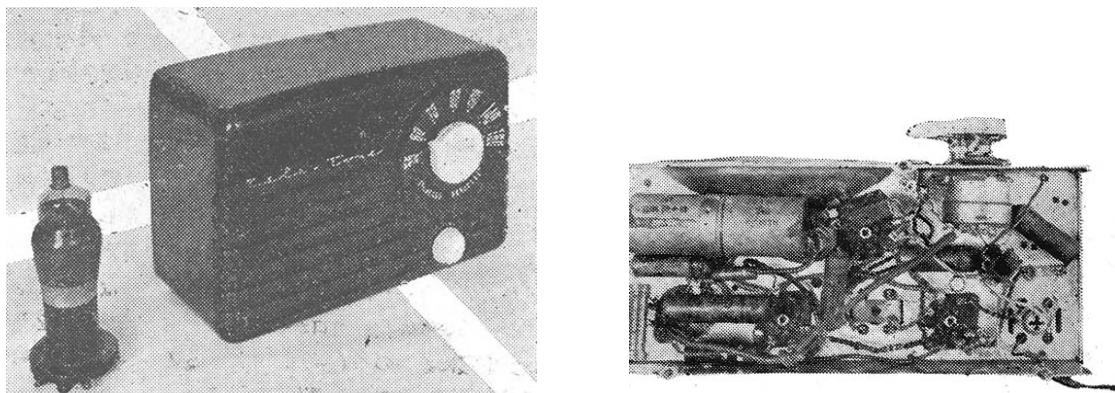
キャビネットの発声部分は図の如くでネットレスである。調節部分は“チューニング”と“ボリューム兼 AC スイッチ”的 2 個所で、チューニング直結であるがスーパーとしては撰択度が低くブロードなので操作はさして困難ではない。

同調周波数帯 535kc/s ~ 1670kc/s、電圧は 105 ~ 125V、50 ~ 60c/s の AC 及び DC の両用で 30W である。

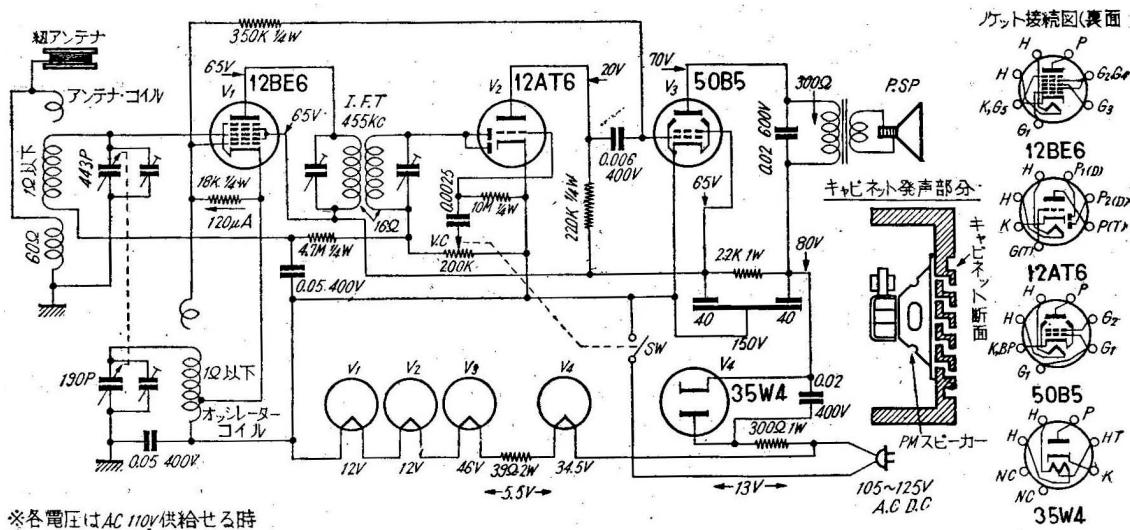
真空管は周波数変換 12BE6、第 2 検波 AVC 兼 AF 電圧增幅 12AT6、AF 電力增幅 50B5、整流 35W4 の配列で先代に当る 12SA7-GT、12SQ7-GT、50L6-GT、35Z5-GT の後を襲うものである。

回路は第 3 図の如く標準的な 5 球スーパーから中間周波增幅を無條件に何の未練もなく切取ってしまったもので特に変わったところはない。

アンテナ端子はなく 実際には大きな屋外アンテナ又はアースアンテナとするとハムが出て使えない、故にアンテナ端子は無い 長さ約 5 米の可撓性に富むヴィニール被覆の“MAGIC CORD”(紐アンテナ) が出てるのでこれにマッチさせるためか相当の高インピーダンスの 1 次線を持つアンテナコイルが使用してある。径 9 <sup>ミリ</sup> 粱、長さ 42 粱



第2図 調節部分は“チューニング”と“ボリューム兼 AC スイッチ”的 2 個所で、チューニング直結であるがスーパーとしては撰択度が低くブロードなので操作はさして困難ではない。



第3図 テレ・トーン MODEL-165型の回路

の円棒で2次線はリツ線のバンク巻きとなっており、こわすことができないので詳記できぬのが残念である、バリコンは例の親子バリコンを使ってトラッキングは淡白にOKとしている。オシレーター部分は特にグリコンを使用せず、オシレーター・コイルに巻き込んだフリー・エンドのコイルの分布容量を利用しているのは、U-S-A 製のこの種受信機にしばしば利用される所である。第2検波 12AT6 の3極管部はグリッド・リークに高抵抗を使ってバイアスしカソード回路へ R, C を入れてバイアスする如き部分品の増すことはやっていない。ついでのこと AF 電力増幅 50B5 のバイアス発生装置を省略するため動作中周変管 12BE6 の発振グリッドが負になるのを利用して OK としている。勿論局発振電圧をよく測った上でやっているからバイアス不足でプレート電流が流れ過ぎて短時間にボケたり、電圧が下るやうなことはない。

AF 電力増幅 50B5 は低いプレート電圧でジャンジャン……パワーの出るビーム管なので整流回路は半波整流で OK である。

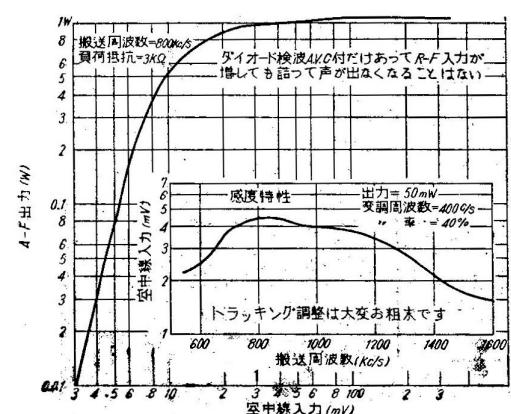
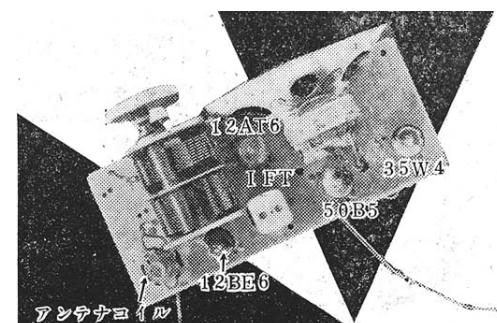
レスなのでいわゆるフローティングシャシーとして -B 配線を浮しているが  $0.05\mu F$  のコンデンサーが挿入されているのでシャシー止ネジ紐アンテナのむけたところに触れると電灯プラグの挿し方によって電撃を受けることに変りはない、ただ誤ってアースにタッチしてもフューズが飛ばないだけである。

SP は 4 インチの PM であるが本邦製のより感度が良く、はるかに楽に発声しており、尻が小さいのはスペースが少なくて済み便利である。

実際に使って見ると?

音量は極めて豊富で 30G-P9、或は国 2 にパーマネントを付けて無理に RF 入力を押し込んで検波管を飽和させて苦しまぎれに出す声とは比較にならぬスムーズさである。利根川畔に近い北総の地で紐アンテナを 1 尺程出せば AB, AFRS, AK が実用になる。しかし紐アンテナを全部伸した程度でも国 2 を最高感度にしたような AK ~ AFRS ~ AB と連続してはいるようなことはなく 180kc/s 間隔の之等の放送間に猶 3 チャンネル位いは収容できる無音地帯がある。標準信号発生機で選択度をとってみると 140kc/s 及 600kc/s で  $\pm 5\text{kc/s}$  離調で 3db,  $\pm 10\text{kc/s}$  で 10 ~ 11db,  $\pm 20\text{kc/s}$  で 19 ~ 22db 程度で余り優秀とはいえないが実際には上記の通りである。

電灯外電圧が 100V あればフルに働らき、75V に落ちても変圧器の御世話にならなくとも楽にスタートする球の良



第4図 振幅及び感度特性

---

いのはありがたいものであるとつくづく感じる。

しかしよい点ばかりはないので、無信号状態ではレスフローティングシャシー特有の微かなハムがはいり、聴取状態でも平滑抵抗の入口からビーム管プレート電源をとった受信機に共通のハムっぽい音がするのは否めない事実である。(筆者は原口無線電機 KK 勤務)

(『無線と実験』1950年8月号。旧漢字は新漢字に変更した。読みにくい漢字にはルビをつけた。「真空管一覧表」は省略した。)